

学校を
創る

特別支援教育の視点を生かした学校経営

市川市立曾谷小学校長 はやかわ 早川 じゅんこ 淳子



1 はじめに

特別支援学校に26年間勤務し、市の教育委員会で特別支援教育を担当した後、小学校教頭を経て、現在、曾谷小学校校長として勤務している。小学校での担任経験がない私は、小学校の教頭の辞令をいただいた時には、正直、途方に暮れてしまった。特別支援学校の教員を志し、積み重ねてきた経験は捨て、ゼロからスタートするのような思いだった。しかし、障害のあるなしに関わらず、子どもは子どもである。目の前の子どもたちの魅力に助けられながら、自分が小学校にいる意味を考え、これまでの姿勢を生かした、自分なりの管理職像を模索するようになった。

2 曾谷小学校について

本校は、市川市の市街地から離れ、古くからの自治会の活動が活発な地域にある。児童は、明るく素直で人懐こく、素朴でかわいい印象の子が多い。学力は、向上が見られるものの、国や県の平均よりもやや低くなっている。人懐こく甘えん坊な子どもたちの中には、家庭的な背景から寂しさも抱えている子もいるのかもしれないと思うことがある。また、個別の支援を要する児童や、家庭へのサポートが必要な児童も多いが、教職員は温かく熱心で、一人一人によく対応しようと努めており、家庭との連絡も丁寧にとっている。「いろいろな子がいるのが当たり前」という意識があるように見え、「すべての子どもを包括する教育」である「インクルーシブ教育」が、自然に実現できているようにも思える。

本校の学校教育目標は、「『ゆめ あすから』 チャレンジする子どもたち～ みんなではぐくむ『曾谷っ子』～」である。地域とのつながりを大切にしながら、子どもたちがより良い人生を歩んでいける力を育むことが学校の使命であると考えている。

3 本校の課題

- 学力面へのアプローチが十分にできていないのではないかな。
- 人懐こい子どもたちだが、メリハリをつける力が育っていないのではないかな。
- 教職員の、児童の人権意識を育てるという意識が十分ではないのではないかな。

特別支援学校で子どもの人権を重視し、子どもたちの自立に向けた教育に携わってきた経験によるものかもしれないが、このような課題を感じ、校長としてこれらの課題にどう向き合っていくか、自分なりの姿勢を探り取り組んできた。

4 具体的な取組

(1) 「校長先生との約束」

- ①上靴のかかとを踏まない。
- ②勉強するときは足の裏を床に着ける。
- ③友達を呼び捨てにしない。
- ④靴箱の靴をそろえる。

これらは、子どもたちに守るよう働きかけるべく指導を教職員へお願いしていることでもある。意識してほしいことはそれぞれ以下のように考えると考え、教職員に発信している。

- ①：安全に配慮するとともに、身だしなみを整え、心の緊張感と自尊心を育てる。

- ②：全ての子どもが学びやすくするために必要な児童理解の視点を持ち、学ぶ環境を整え、必要な支援を行う。
- ③：他者を尊重する人権意識を育て、緊張感を持って子どもに向き合うため、丁寧な言葉遣いをし、子どもを呼び捨てにしないなど、教師が手本となる。
- ④：学校全体の環境をより良く整える。

また、目指す教職員像のトップに、「一人一人の児童を理解し、多様性を尊重し、人権意識を持って、児童を大切にする教職員」ということを上げ、機会を捉えて発信している。このことこそが、私の校長としての使命であるように感じている。

(2)学校経営のユニバーサルデザイン

○児童理解の推進や担任へのサポート

ユニバーサルデザインの基本は、的確な実態把握である。授業の参観や担任以外の職員との情報交換を通じて、児童の実態や、家庭的な背景などを把握し、障害や認知面の特性、感覚面からのアプローチなどの視点を伝えながら担任と共有している。

○教職員へのアプローチ

自分を含めて、教職員にも、年代や経験による指導力の違いだけでなく、視覚的・聴覚的情報処理能力、コミュニケーション能力など、得意不得意の差がある。このような視点で、校長の意図が伝わりやすいよう、言葉でのアプローチに加えて、「校長室から」の発行や、週指導計画のコメントでの文字による説明、授業の様子を写真に撮って見せながら良い点や改善点を伝える、などの工夫をしている。また、「ユニバーサルデザインを生かしたわかる授業づくりの推進」を経営の重点に置き、研修にも積極的に取り組んでいる。

○「校長先生の話」

最も戸惑ったことが、朝会等での「校長先生の話」である。1年生から6年生まで、発達段階も認知的な特性も大きく異なる450名の児童が、興味を示し理解できる話をするの

は至難の業である。しかし、これをあきらめでは、自らが示している姿勢を否定することになる。そこで、パワーポイントによる視覚情報を活用するとともに、担任に発達段階に応じた指導を加えてもらうよう、事前に話す内容を伝えるようにした。「校長先生との約束」もこの方法で子どもたちに伝えている。各学級で朝会の話振り返りだけでなく、高学年は聞き取ったことを必ずワークシートに書かせてくれている。ある担任からは「視覚的な情報があるとわかりやすいです

ね。」と言ってもらった。この実感を授業に生かしてほしいのである。また、インフルエンザ



※朝会のスライド

の流行で朝会が中止になった時には、3年生の児童が、「校長先生のスライドが見たかった」と残念がってくれた。1年生の児童が「朝会の写真が見たい」と校長室に来たこともあった。「わかる」楽しさを感じてくれているようで何より嬉しかった。

5 終わりに

この3月に公示された新学習指導要領の「前文」を読んで、「共生社会」の実現への強い意志を感じ、感動を覚えた。また、少し大げさだが、自らの姿勢を後押ししてもらえたようにも感じた。特別支援教育の視点を生かしながら、「前文」で示された「児童が学ぶことの意義を実感できる環境を整え、一人一人の資質・能力を伸ばせるように」努め、「自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓く」ことができる子どもたちを育てていきたい。

学校を支える

地域の教育力を生かした豊かな心の育成
～地域と連携した特色ある教育活動の実践を通して～



御宿町立御宿中学校教頭 よしの ひでき 吉野 英樹

1 はじめに

本校は、生徒数 116 名の小規模校で、町内唯一の中学校であり、学区は御宿町という地域そのものである。町の期待も大きく、それに伴う連携が必要不可欠となっている。

そのため、学校行事や各教科・道徳・特別活動及び総合的な学習の時間等の中で地域の特色を生かし、地域や外部人材と連携した授業等を展開してきた。地域にある「自然、歴史、人、もの等」を教育財産として活用することで、確かな学力の向上を図り、郷土愛や豊かな心を育むことを目指しながら取り組んでいる。

子どもたちがやがて自立した大人となり、生涯に渡って生きる力を身に付ける上で、地域の学校で学ぶ意義は大きい。同じ地域で暮らす仲間とともに“その地域の学校ならではの”教育に触れることは、生徒にとって「生きる力」を身に付けることになるのはもちろん、心の中に地域への誇りや愛着を育むことにも繋がる。

地域との連携を生かした教育活動について、その連携の中心ともいえる教頭としてどのように学校を支え、生徒と地域を繋げていくのかを模索している。

2 地域と連携した特色ある教育活動の実践

御宿町と野沢温泉村の姉妹都市提携事業から生まれ、今年で 42 回目を迎える海や山の交流などの特色ある教育活動を実践している。

また、地元のライフセービング協会や御宿町国際交流会との連携など、行政・地域・学

校が一体となった実行委員会が組織され、その枠組の中で行う活動である。そのため、地域の方と触れ合う場面も多く、お互いの地域への理解を深めるとともに、様々な人々に対する感謝の心を育むことにも繋げている。

(1)推進体制の整備

これまでの実践では、それぞれの活動の担当職員に企画・運営が任されてきた。そこで、より組織的な推進体制を構築するため、校務分掌に「地域連携教育推進委員会」を立ち上げた。校長の指導の下、教頭及び教務主任がリーダーシップをとり、学校全体としての協働意識を高めようと努めている。

(2)地域と連携した特色ある 3 つの教育活動

本校では、地域との連携を生かした特色ある教育活動を教育課程に位置付けている。そして、地域の教育財産の活用や、それぞれの教育活動の関連性や系統性についても明確にしながら取り組んでいる。

①長野県野沢温泉村との交流及び連携

1学期は、御宿町の自然や文化・歴史などについて、グループごとに調べ・まとめる学習を行う。それを、7月に実施する野沢温泉村との「海の交流」で紹介する活動に繋げる。

「海の交流」



地引網体験



イカの一晩干し体験

2学期は、1月に実施する「山の交流」(ス

キー体験)に向けて、野沢温泉村の自然や文化・歴史等について調べる。また、地元商工会女性部の方を講師として、土産として持参するための「吊るし雛」(御宿町の伝統工芸品)を作成する活動を行う。



「吊るし雛」の作成



「山の交流」(スキー体験)

3学期は調べ学習の成果を生かし、「山の交流」当日のスキー教室の活動をメインとして、終了後は1年間のまとめや記録の整理を行う。

②ライフセービング協会との連携

「いのち」を考えさせる授業のため、ライフセービング協会に協力を依頼している。

〈保健体育での授業協力〉

体育分野では、1年生は「水の浮力体験・サバイバルスイム基礎の習得」、2年生は「助けられる体験からサーフスキルの習得」、3年生は「ライフセービングスキルの習得」を海やプールで実施した。



「ライフセービング」体験

保健分野では、心肺蘇生法やAEDの実習と生命の尊厳についての学習を行った。



「心肺蘇生法」実習

〈社会体験学習での授業協力〉

地域の特徴ある職業であるライフセーバーの体験実習を通して、「人命を守る職業観の育成」を図っている。

③御宿町国際交流協会との連携

御宿町は、メキシコのアカプルコ市、テカマチャルコ市と姉妹都市の協定を結んでおり、本年度は、メキシコ人学生 10 名が来校した。本校では、全校生徒で両国の旗を振り歓迎し、その後生徒と一緒に、家庭科での被服、保健体育科での柔道、音楽科での箏の演奏交流などの授業を展開した。

(3)地域の特色を生かした教育課程の評価・改善について

本校における教育課程の評価については、学校評価、学校関係者評価を年3回実施している。これにより、年度途中でPDCAサイクルで見直しを図り、後半の教育活動の改善に繋げている。また、評価結果に基づく課題分析及び改善策の吟味は、校務分掌上の学校評価委員会を中心に実施している。課題としては、評価の視点を明確にすることや、更に組織的な評価体制の構築があげられる。

3 おわりに

地域との連携を生かした教育活動を展開する中で最も強く感じることは、取り組んでいるときの生徒の「目の色が違う」ということである。これは意欲や能動性の高さの表れであり、それが理解・習熟の深まりや郷土愛・思いやりの心に結び付いているのが生徒の姿から実感できる。

これからも、「活動あって学びなし」とならないよう、ねらいの更なる明確化や評価の工夫、そして組織的・協働的な推進体制の確立を図りたい。そして、この取組を充実させていきたい。

そのため、校長の経営方針の下、校務分掌を配慮した上でそれぞれの連携に対して中心となる職員を配当することが必要である。教頭として、担当の職員との連絡を密にし、負担の軽減を図るとともに、関係機関等との窓口として連絡・調整が図れるように努めていきたい。

学校を動かす

支えあいながら

県立八千代西高等学校教諭

かわい つねお
河合 常雄



1 はじめに

昨年度から教務主任として校務に当たっているが、毎年の決まっているスケジュール通りに仕事をこなしていくことだけに汲々としていた。実際、年度末の学力検査という緊張感を強いられる仕事を終えると、すぐにまた新年度の準備が始まるといったあたりに教務主任の仕事の大変さを感じていた。学校を動かすというより行事に動かされている感じだったが管理職、教務部の同僚に助けてもらいながら1年目の任を果たした。

2 新任教務主任研修会を受講して

教育課程についての班別協議があり、他校の教務主任の先生と情報交換をする機会を得た。本校と同じような問題点を抱えている学校もあり、普段当たり前のこととして進めていることも、少なからず問題を含んでいることを気付かされた。高校では学校が異なれば校内のあらゆることが少しずつ違っているのは当たり前のことだが、程度が過ぎると、その学校はガラパゴス化してしまう。人事異動してすぐのころは気になることも、何年か経つと慣れてしまう。慣れてしまうと、こういった機会がなければ気付かないままになる。それで済むこともあるだろうが、大きな課題を抱えたままの状態のようなものだ。とかく学校という狭い職場で働く身にとっては初任者研修、5年経験者研修といった研修で得られた他校の先生方との意見交換は貴重なものであり、その当時は感じなかったことだが、今となってはありがたいものだったと痛感する。10年経験者研修（現 中堅教諭等資質

向上研修）が終わるとそういった機会はめったにないので、このような研修があればいいと思う。この新任教務主任研修とは別の形で。

3 本校において

学校によって名称が異なるが管理職と各主任が集まっての委員会を本校では調整委員会と呼んでいる。企画委員会と呼んでいる学校もあるだろうが、この“調整”という名称がピタッとはまっていると思う。正に学校内で必要かつ重要なことは、この調整することだと実感している。

本校においては、職員の居室は学年室が基本的であり、生徒の指導はもちろん、様々なことが学年を中心として進んでいく。そこで学年と学年、学年と分掌の調整は各主任にとって大事な役目となっている。

“まずは学年の考えを聞いてから”が基本的なスタンスだが、お願いしなければならないこともある。そこは調整しながらである。

4 おわりに

今年度、校長より、八千代西高校が目指すグランドデザインが示された。そこには、学校をこうしたい、教師としてこうありたい、生徒にはこうなってもらいたいということが具体的に示されたものだ。中学時代の学力は大事であるが、高校に入ってから、再スタートすることもできることを1人でも多くの生徒に実感してほしい。グランドデザインを実現する、“チーム八千西”の一員として、職員同士お互いを支え合いながら頑張っていきたい。

研究主任としての実践報告

 南房総市立白浜中学校教諭 しらい りゅうた 白井 隆太


1 はじめに

私はこれまで校内研修を受ける側だったが、昨年度から研究主任として職員の全体研修を企画・運営する立場になった。実際に研究主任として活動してみると、どのような研修を企画することが学校目標に近くと共に職員や生徒に、還元できるのか考えるよい機会になった。今回、昨年度から本校が取り組んでいることについて紹介させていただく。

2 具体的な取組と成果

(1)白浜中の研究主題

「生徒が自ら学び、思考し表現する力を身につけさせる学習方法の工夫」

平成26年度から27年度まで、セルフチェックシートを基にして授業改善に取り組んだ。この取組により、各教科の特徴を生かした授業展開を実施することができた。そこで、今年度は、授業の中に「思考」「表現」する場面を意図的に設け、授業の中で一人一人の考えや意見を持ち、表現することで深い学びにつながると考えた。

(2)実践内容

研究主題に迫れるよう、各授業での工夫だけでなく、全職員、全生徒が統一して取り組むことを考え実践している。

- ①セルフチェックシートの項目に着目し、各教科の授業で、「思考する場面」と「表現する場面」を効果的に作りだす実践をする。
- ②授業の中に、「ユニバーサルデザイン教育」の視点を取り入れ、生徒が学習しやすい環境を整える。
- ③各教科での授業規律及び板書方法の統一

(3)研究を通して

①授業計画を立てる際に、「思考する場面」と「表現する場面」を授業の中に取り組みくことを盛り込んだ。そのことにより、授業での表現する機会が増え、生徒が意欲的に取り組めるようになった。

②ユニバーサルデザイン教育の研修を行い、少しの工夫を加えることで、生徒の学習意欲の高揚を実感できた。各教科の特性に合わせて、取り入れることができた

③授業の基礎部分である授業規律を「授業前」「授業中」「授業後」の3領域で大切にする授業の約束を生徒に提示した。また、職員は、「目標」「まとめ」の板書方法を統一して行った。これらにより、生徒の授業への取り組み方が変容し、授業に集中できるようになった。

3 今後の課題

校内研修において、授業の工夫をそれぞれの先生が実践してくれた。今後は、授業をお互いに参観し、表現力・思考力を高められる授業を創りあげていきたい。また、来年度より中学校では、新学習指導要領の移行期間が開始し、「主体的・対話的で深い学び」が求められているため、校内研修の内容に加えたい。

4 おわりに

職員の協力もあり、研究主任として有意義な取組を行うことができた。今後も、学校や地域の実態に合わせて、職員及び生徒のためになる校内研修を企画・運営し、より良い学校運営に協力できるように積極的に活動したい。

授業を
創る

スマートフォンを活用した、 アクティブ・ラーニング（高校数学科）

県立千葉高等学校教諭

おおはし しんや
大橋 真也



1 はじめに

新学習指導要領でも「主体的・対話的で深い学び」が重視され、高等学校の授業にも徐々にではあるが、アクティブ・ラーニングが導入されてきている。本実践は、高等学校数学科におけるアクティブ・ラーニング型の授業として実施した。なお、この実践は昨年度のものであり、前任校である千葉県立船橋啓明高等学校におけるものである。

2 スマートフォンの授業活用

中学校や高等学校の生徒にとって、今やスマートフォンは、ゲームやコミュニケーションツールとして手放せない道具であり、依存傾向などから社会問題になることも多い。また一方でスマートフォンは、生徒にとって最も身近な情報ツールであり、操作に関しては既に習熟しており、ほとんど準備することなく学習ツールとして活用できる。

スマートフォンの授業への活用に関しては、数年前より高等学校の数学科において問題演習中心の授業で行っていた。問題演習の授業では、生徒は解答解説時に板書を写すのに専念するため、問題を再思考する機会がなく、定着がなされていない現状が見られた。そのため、生徒の演習時間内に解説の文字は小さめでも1面分に収まるように板書し、解説時には、ノートをとらせずに解説内容を集中して聴かせ、発問なども行い思考させることを重視した。板書をノートに写す時間はとれないことから、各

自のスマートフォンで黒板の撮影を行うことを授業公認とした。生徒は自宅でスマートフォン中の板書写真をもとにノートをまとめるという流れである。この試みは、授業中にスマートフォンの活用を認めたことや、同じ問題を3回検討する機会が与えられることもあって、小テストや考査などで大きく効果をあげた。

本実践は、この経験を基にして、スマートフォンを授業に活用できる学習ツールとして、アクティブ・ラーニングを意識して行った。

3 授業実践の概要

学級：数学Ⅲ選択者 17 名

単元：数学Ⅲ「積分とその応用」

授業内容：様々な不定積分・定積分の演習

授業の形態：ジグソー法

本実践は、この単元内では3回の実践を行っており、1回当たり3時間(50分×3時間)の授業で組み立てている。ここでは、第1回の3時間の実践に関して説明する。

第1回は、「不定積分のランダム問題演習」として実施した。数学Ⅲにおける不定積分は、置換積分法、対数積分法、部分積分法などを含め問題によってその解法が多岐にわたっており、思考力や判断力が試される単元でもある。前時に約30問の問題をプリントで与え、17人を約4人の4つのグループに分け、各グループに7、8題の問題を割り当てた。各グループでは、問題を1人に約2題ずつ程度分担し、第1時間目までに完全解答を作成することを課題と

した。

・第1時間目：それぞれのグループ内で問題の担当者が分担した問題の解き方に関して説明し、全員がグループに割り当てられた7, 8題全てについて、各問題のエキスパートとなることを目指した。

・第2, 3時間目：それぞれのグループから約1名ずつで構成された新たな4人グループを再構成し、それぞれのグループ内で解説された問題全てに関して、他のグループにいたメンバーに解説し、完全解答を作成させる。

実施の際に留意したことは、単なるノートの書き写しでなく、口頭で相手が理解できるまで説明することを重視した。

この授業におけるスマートフォンの役割は、最初に各人に与えられた問題に関して、解法を探すこと、解法の手がかりになる事柄を探すために使用させた。また各グループで自分の担当の問題を解説する際にも使用させた。スマートフォンには、4月当初より数学ソフトウェア「Mathpix」と数学サイト「Wolfram Alpha」を事前に設定させており、授業の中でも度々デモンストレーション等で使用法を説明していた。「Wolfram Alpha」は、Knowledge Engineの一つであり、数式を入力すると、それに関連した因数分解、微分・積分、グラフ等を表示してくれる。数式の挙動の理解や計算結果、計算過程を知るのに有効である。「Mathpix」は、手書きまたは、プリントをスマホのカメラ機能で撮影することによって、自動的に数式を認識してくれる数学ソフトウェアである。

すぐに解答を表示する数学ソフトウェア

については、思考力・判断力を育成することに問題があると思われがちだが、いずれのソフトウェアにおいても計算過程が英語で表示されるため、生徒は数式から表示内容の意図することを類推し、学んでいない関数(逆三角関数, 双曲線関数, Γ 関数など)が表示された場合、入力を再考しなければならない点で、様々な思考力や判断力が要求された。また自分が与えられた問題の説明を他者に行うという点で、思考力・判断力・表現力の育成を育むことができたと考ええる。

4 授業の効果

今回の実践ではきちんとした効果測定は行っていないが、日常から対話式の授業を行っている中で、この実践後から、発言が増え、積極的に問題に取り組む姿勢が見られるようになったことは大きな変化である。自分で問題を解き、説明することにより、自身の問題であることを認識し、「やらされ感」のない学習ができたことと、内容の理解が深まったことによる自信につながったと考えている。生徒からも「よい学習の時間の使い方ができた」、「今までにない斬新な授業であった」との意見を得た。またスマートフォンの画面を持ってきて、その内容に関して質問してくる生徒も見られた。スマートフォン中の数学ソフトウェアが彼らの学習ツールとしてようやく機能してきたと考えられる。

5 まとめ

数年後には学校現場に生徒1人1台のタブレットPCが導入され、電子教科書等も整備されると言われている。学校公認で授業中にスマートフォンの代わりにタブレットPCが使用できる日も近い。このようなICT機器を活用することで、よりアクティブ・ラーニングを進めることが可能になり、生徒の学習に対する意識や自信を高めることができたらいと考えている。



子どもを知る

認める ～子どもの心に響く伝え方～

成田市立大栄幼稚園教諭 はない 花井 裕紀



自分が幼稚園に通っている頃、「幼稚園って楽しい」「先生が大好き」と思い、幼稚園教諭を目指すようになりました。しかし、実際に幼稚園教諭になってみると、子どもたちの意欲を引き出すにはどうしたらよいのだろうと悩むことばかりでした。そのような中で、自らの幼児期を振り返った時に浮かんできたのが先生の姿でした。先生に認めてもらおうと嬉しくなって「もっとやりたい」「楽しい」と思えました。そこで、自分も子どもを認めて楽しいと思える環境を作っていこうと思い実践しましたが、「認める」と一言にいても「すごい」「やったね」だけでは子どもの心には響かないことがわかりました。初任者研修の実習の中で、そのことを講師の先生に相談すると「子どもの姿を捉えることで子ども理解につながる」というアドバイスをいただき、個別の記録を書いたり、自分自身も子どもたちと一緒に遊び、子どもたちと共感したりしていくことを始めました。すると、「認める」という言葉が子どもにわかりやすい「手がピンと伸びている」「足を上げるタイミングがいいね」などの具体的な言葉に変わっていきました。この経験を通して相手に何を伝えたいか、ねらいをもって指導する大切さと「伝える」ということの難しさを改めて感じました。

そして、これからも子どもが楽しく生活できるような環境を整え、私自身も子どもと一緒に楽しんで見て感じて、五感を十分に使い共感しながら幼児理解に努めたいと思います。

子どもを知る

自分らしく ～すべては子どもたちのために～

市原市立五井中学校教諭 おおもり まなぶ 大森 学



初任者研修では、学級経営や部活動経営、教科指導や生徒指導など様々なことを学ばせていただいた。その中で「自分らしく」教育活動を行っていけば良いということを多くの講師の先生方がおっしゃっていたことが特に印象に残っている。

昨年度、中学生の頃からの夢を叶えて、教員としてスタートを切らせていただいた。やる気に満ち溢れていた私は、いかに「教員らしく」振る舞うかを意識しすぎて自分にできないことが判断できずにいた。教員として、できなきゃいけないという焦りで空回りしてしまっていたと思う。しかし、「自分らしく」という言葉で自分にできること、自分の個性を改めて見つめ直すことができた。二年目としての今の私には先輩方のようにできないことがとても多い。それでも、若さと明るさ、柔らかい口調で子どもたちに寄り添い、子どもたちにとって話しやすい教員でいることができるのではないかと考え、教育活動を行っている。

教材研究を行っているとき、この内容は視覚的に提示したほうが子どもたちは理解しやすいのではないかと。部活動経営をしているとき、一人一人に合った声掛けやアドバイスを行えば成長につながるのではないかと。改めて教育は受け手である子どもたちのために行うものであり、子どもたちの未来のことを考えて行わなければならないと考える。「すべては子どもたちのために」を忘れず、私は教員として子どもたちと向き合っていきたい。